奈良

ORGANIC VILLAGE 宇陀市

うだ オーガニック通信 Vol.5

編集：山口 麻那

目次

①オーガニックビレッジフェスで生まれた対話から
②なぜ国は有機農業を推すのか
③新旧・フェス執行部座談会
④農業センサスからオーガニック戦略を考える
⑤ひとり農業の壁を越えてシリーズ
取材先【株式会社 ラウアイ】様

フェス実行委員会が企画メイキングをnoteで発信！

Instagramで宇陀オーガニック発信中！

食べて、知って、語り合う！
宇陀の農業の「これから」

宇陀オーガニックビレッジフェス2026

開催：11月22日(日) 10：00～18：00 まで！
場所：類農園　Vutai(ヴタイ)
【宇陀農業の未来の担手を徹底討論】

フォーラム1：若手x ベテランが語る
「宇陀での就農とリアルな経営」
●プロ農家激推し！ 秋野菜の「大試食会」
●宇陀テロワールを満喫♪ 食のマルシェ

①オーガニックビレッジフェスで生まれた対話から

小松 富美子
（オーガニックビレッジ・ボランティアライター）

あらすじ

「そんなことしてたんや！」から始まる、宇陀の食と農のつながり。

この記事では、昨年開催された「うだオーガニックビレッジフェス」を、一部進行役の窪一さんと、二部担当の山口貴義さんが振り返る対談企画を取材した。

一部では、農業従事者たちが、就農のきっかけや経営、これからの夢を語り合い、規模拡大志向・小規模志向それぞれの価値観が尊重される宇陀農業の懐の深さが見えてきた。

二部では、学校給食や農産物流通、子どもたちの農業体験など多彩な取り組みを紹介。給食担当者が農家を一軒一軒訪ねて思いを知り、子どもたちに伝える活動には生産者自身も驚かされたという。

果たして、フェスは「知る場所」から「つながり、次の一歩が生まれる場所」へと歩んでゆけるのか！？

有限会社　山口農園
（農業生産法人）

代表取締役 社長
山口 貴義

所在地：奈良県宇陀市
榛原大貝３３２

続きはこちら

https://note.com/gay_fairy9265/n/nf9e7e28cc323

②なぜ国は有機農業を推すのか

窪 一
（NPO法人ハンサムガーデン）

あらすじ

『有機面積を〇.五%から二十五%へ。国が有機農業に本気を出す、本当の理由。』

二十五%（約百万ha）へ、策定時の〇.五%から三十年で五十倍にする目標を掲げる。

農水省担当者への取材から見えた背景は、輸入資材への依存リスク、食料生産の持続可能性、気候変動への耐性、土壌生物相の劣化防止という四つの大義。

国は、みどりの食料システム戦略推進交付金でオーガニックビレッジ事業を後押しし、宇陀市はいち早く手を挙げて日本初のオーガニックビレッジを宣言した。

給食での地元有機農産物活用や、費用・時間・ノウハウの壁が高い展示会出展への支援など、現場の農家に届く具体策も動き出している！

そこんところをまとめました！

NPO法人
ハンサムガーデン

代表　窪 一

所在地：奈良県宇陀市
榛原比布1312

続きはこちら

https://note.com/gay_fairy9265/n/nf9e7e28cc323

③新旧フェス執行部メンバー座談会

松田　麻由子
（NPO法人ハンサムガーデン）

あらすじ

八十人から二百人へ。新旧執行部が語る、宇陀オーガニックビレッジフェスの舞台裏。

昨年二〇二五年のフェスは、来場者数が二百名と、前年比大幅増を達成。

フェスの流れは、ワンデーカレッジ形式を採用した一～三限目構成となり、盛り上がりを見せた。

一方、この流れでは、専業農家が三限目に残りにくいという課題も浮かび上がった。

座談会のメンバーは、二〇二五年実行委員長の西川育宏さん、副実行委員長の私(松田)と、二〇二六年実行委員長の小川泰文さん。

座談会で挙がった内容は、部会制が「狙わずに生まれた」体制であったこと、事業所管が企画課から農林課へ移ったから、農家主体の運営がしやすくなったこと等である。

今年は、担い手育成やオーガニックビレッジ交付金終了後を見据えた「ポストオーガニックビレッジ」の方向性を模索。さらに、五年間の総括を発信する記者会見という新提案も飛び出した。

続きはこちら

https://note.com/gay_fairy9265/n/nf9e7e28cc323

④農業センサスからオーガニック戦略を考える

窪　一
（NPO法人ハンサムガーデン）

あらすじ

国中の農家が減るが、宇陀では増える有機農家。「土俵をずらす」生存戦略とは！？

農林業センサス二〇二〇→二〇二五のデータをもとに、近畿と宇陀市の有機農業の変化を比較。

近畿全体では、有機経営体数が十八％減、有機面積も十七％減と縮小。一方、宇陀市は経営体数四十％増、有機面積四十六％増と、近畿で際立った増加を見せている。

基幹的農業従事者の平均年齢は、六十八・九歳まで上昇し、大規模化と担い手の高齢化が同時進行する構造がくっきり見えはじめた。

今、宇陀の有機農家は、面積拡大には頼らず、「有機農家ミーティング」を軸にしたブランディングと直販強化により、経営体数は十五件から二十一件へ増加。また、販売量・面積は三～四割増を実現している。

フェスで語りたい統計の裏っかわをこの一本に！

⑤ひとり農業の壁を越えてシリーズ

田村 知絵子／山口 麻那
（大学インターン生）

あらすじ

第一回 柏木 英俊 さま（株式会社 ラウアイ）
～会計士志望から農家へ。数字で経営する、躍進農業経営のリアル～

この取材シリーズでは、一人での農業経営に限界を感じた農家さんが、新たに人材を雇用して農業法人化を進めた体験談を伺う。

本取材を通して、次世代の農家がチーム営農化で成功するためのヒントを得ることが目的だ。

初回では、奈良県宇陀市で株式会社ラウアイを経営されている、柏木 英俊さんに取材を行った。

大学の法学部をご卒業後、会計士の勉強を続けるも、自然農やパーマカルチャーに関心を持たれる。農業アルバイト「ボラバイト」を始めるうちに、機会を得て独立し、ひとり農業を経験。自分で農業はできるという感覚を得た一方で、困難な状況が続いたため、改めて会社へ就職される。

入社後すぐのこと。会社から農業法人を立ち上げる話が出た。そこで、柏木さんは、ご自身に会計の知識と農業経験があることを理由に、立ち上げを担当。数年後、自ら株式会社ラウアイを起業し、現在に至る。

続きはこちら

https://note.com/gay_fairy9265/n/nf9e7e28cc323

実行委員会へのお問い合わせは

うだオーガニックビレッジフェス実行委員会事務局
〒633-0292
奈良県宇陀市榛原下井足１７－３ 宇陀市役所２階
宇陀市農林課 オーガニックビレッジ推進室内
オーガニック通信編集部
nourin@city.uda.lg.jp